

画廊(ギャラリー)は入りづらいと感じる人も多いようだが、構える場所ではない。絵を見る自由な空間であり、入場料もいらない。作品が気に入れば一日いたつていいし、つまらないと思えばそのまま出ればいい。

画廊には単純に言って企画廊と貸し画廊がある。双方ともひとつには絵画を売買する場だが、違いは大きい。企画廊は自らが望む作家に依頼し、合意の上で、経費はもとより全般的の責任を負って展覧会を企画する。中でも、有名無名を問わず良いものを世の中に発信しようと、熱意を持つ孤軍奮闘する企画廊は貴重だ。しかし、運営維持が難しいということがあり、残念ながら少ない。

一方、貸し画廊は自主性に乏しく、主に会場費を取ることで運営。申し込めば誰でも展覧会を開けるとも言えるが、借り手の自己満足で終わることが多い。また他にも、半企画などで自分の色を出したりと、画廊にはさまざまな形態がある。美術館も多くの問題を抱えている。ほとんど自主企画をせず、客集めのポピュリズムに主眼を置いて作られている。ほとんどの美術館もそんな姿勢を貫き、他館からも着目され、信頼を得ている。

僕は最初から、画家への届けようと、思いを込めて一点一点大切に扱ってくれる美術館。そこに訪れる世評に囚われず、自らの目で見て暮らしに取り入れようとする絵画ファン。心ある画廊や美術館は、作り手と見手を仲立ちし、相照らす出会いの場を創出してくれるのである。

私事ですが、制作拠点である宇和島市の「べにばら画廊」で11月27日～12月4日、各地で展開中の水彩展を開きます。ギャラリー・トークは11月30日です。(ご来場ください。

(吉田 淳治・画家)



### 画廊と美術館

登竜門として目指す絵画コンクールなどに、敢えて応募したことがない。また若展を開いても、観客動員にい頃、既存の有力絵画会派繋がらなければいろんな意味で締め付けがくる。文化事業は元々独立採算が難しく、眞面目な美術館はこの間にあって、艱難辛苦を

乗り越え踏ん張っている。愛媛で言えば町立久万美術館。僕の企画展を開いてもらつたからというわけではないが、この小さな町の美術館がそんな姿勢を貫いてきた。それでも独りよがりに陥らず、作品を通して世の中と繋がる機会を持ったのは、各地の画廊などが企画展を開いてくれたからこそであった。